

「聞き書き」学習の試み

——近藤芳美氏著「無名者の歌」を材料にして——

伊 東 祐 博

はじめに

この実践報告は一九七八年度に「無名者の歌」(アララギ派の歌人近藤芳美氏の著)を材料にして「聞き書き」に取り組んだ際のものである。この年の秋、全国高等学校国語教育研究会(略称、全国連)の第十一回研究大会が広島市で持たれたが、偶然の機縁からその運営の事務局入りをする事になっていった。この広島大会の講演講師の一人に近藤芳美氏が決定され、受諾を受けて以来、氏に関係したことを何らかの形で「大きく」(私なりに)取り上げてみたいと考えてきていた。(もう一人のご講師には野地先生にご無理をお願いした。)それが「聞き書き」という形になっていった経過については後述するが、その出発点になったのは、ちょうど使用していた教科書に「『無名者の歌』抄」が載っていたことであつた。

一 「無名者の歌」

朝日新聞の投稿歌壇は「朝日歌壇」と呼ばれている。「朝日歌壇」は四人共選という形がその特色であるが、「無名者の歌」は、その形が発足した一九五五年(昭和30年)からその選者の一人として選に当たつてこられた近藤芳美氏が、この「朝日歌壇」への投稿歌

をもとに一九七四年(昭49)に著わされたものである。その執筆意図について氏は次のように述べておられる。(以下二つの引用は同著「序説・『朝日歌壇』とわたし」より)

その二十年近い歳月が「朝日歌壇」の作りつづけられて来た日々であつた。「朝日歌壇」の作品群はその間、その作者ら——今日の無数の、無名の生活者らの生活と生活の中のもの、悲しみだけをうたい繰り返して来たのかもしれないが、うたい繰り返された彼らの生活、彼らの「生」と呼ぶべきものはこのようにな日々の中にあつた。わたしたちが生きて来た歴史とも言えた。

わたしはいつかから彼らの作品を読み直し、うたわれている生活のよろこび、悲しみと同時に、その、生きて来た歴史ともいふべきものを彼らの中にたどり直してみたい思いをひそかにいだいていた。それは激しく移り動くこの国の戦後史の一時期を、物言わない民衆の心の内部に歴史としてたどることであつた。それを「朝日歌壇」だけがうたい重ねて来た。わたしは「朝日歌壇」の作品群によつてそのような「戦後史」を書いてみたいと思つてた。

さらに、「短歌は生活者の歌、民衆の抒情詩であるべきだ」とき

れ、この「朝日歌壇」の作者及びその作品について、次のように述べておられる。

だが、毎回のその龐大な数の投稿を一体だれがするのか。その龐大な作品の投稿者は、一体何を思つて短歌を作り、短歌を送りつづけて来るのであろう。わたしは選者のひとりとして、時としてそうした疑問の前に立ち止ることがあった。一種の圧倒の前に、と言つてよい。

それはあらゆる階層と、あらゆる職業に及んでいた。農民であり、都市勤労者であり、工員であり、炭坑夫であり、教師であつたりした。わたしたちとともに生きる、この国の、今日のすべての生活者と言えた。同じようにあらゆる地方と年齢の層から作品は送られて来ていた。都市と農村から、少年から老年に至るまで、「朝日歌壇」の投稿者は広い範囲にわたつた。

そうして、そのような作品は一樣に彼らの生きる生活と、その中のよるこび、悲しみをうたいつづけた。わたしたちが「生活歌」と呼ぶ作品である。それを、ほとんど声を合わすかのように、無数の彼らの生活の世界から歌い寄せて来た。選歌のたびにわたしがむかう机の上の、おびたらしい、数千通に及ぶ投稿の葉書の数は、そのまま彼ら生活者の声であり、叫びであり、訴えであり、そのすべてのための「ことば」とも言えた。

近藤芳美氏の短歌に対する考え方がよくうかがえる文章である。ところで、教科書所載の「『無名者の歌』抄」はこの「無名者の歌」からの抜粋であるが、教科書の紙幅の関係から十七首だ

けの抄出にとどめ、さらに原著がとつている一九五五年（昭30）以降の歴史と呼応した形の章の配列によらず、「再構成して、高校生に身近な感情を歌つていると思われる作品から並べるといふ方法」（筑摩書房・現代国語一の指導書）をとつた配列になっている。このことについて氏自身は「現場のみなさんへ」という形で、次のように述べておられる。

この教科書に抄出されたものはそのわずかな一部である。「無名者の歌」を書くとき、わたしはそれを昭和三十年のころから年代順に選び、その間の作者である人々の生活と、生活の中からのことば——うったえを聞きとめつつ、ひそかに推移するものをたどり、一つの戦後史——決して歴史には書かれない無名の民衆の生活と心との中にたどられていく戦後史ともいふべきものを書くことを意図したのだが、その一面は今度の教科書には抄出歌として示されていない。是非ともわたしの「無名者の歌」を読んでいただきたいと思う。

そうした上で、短歌というものが決して特殊な人々による特殊の世界の文学ではないということを知り、かつ教えてほしいものとわたしは念願している。もしそのような特殊なものがあるとすれば、それは歴史の中の、まちがった時期のものなのである。詩歌とは本当はみながつくり、みなが唱え合ひ、みなが享受し合うべきものなのである。みなとは無名の民衆であり、この文章を読まれる年若い学生諸君と言つてもよい。そのような詩歌の存在の事実がここにあり、ということを知ってもらふとよいとわたしはひそかに考えている。これはそのままわたしたちのことばではないのか。

二 短歌学習の目標

高校生の詩歌学習の目標（というか最低到達点というか）はいったいどういふことなのだろうか。私はそれを「せめて新聞雑誌に載っている詩歌に目を留め、読んでみようとする気持ちを持つこと」ということに考えていた。いや、考えていたとは言えないかも知れない。明確に意識して持っていたわけではなく、したがってそれにふさわしい実践も何もないのだから。しかし、能力や感覚や興味・関心にさまざまな違いのある学習者を目の前にしたとき、「ともかく全員」に到達させたい最低線としては、これではないか」と考えていたのも確かである。

もちろん国語学習として、「詩を味わわせ、魅力を感じさせ、その方法を意識させ体験させる」（筑摩・指導書）ことも目標としたいし、とくに短歌の特色を考え合わせれば、専門歌人の短歌を材料にして「短歌定型律に慣れる」ことも、「短歌の叙情の本質に迫る」ことも、ねらいとしてぜひ持ちたいと思う。しかし、そういう目標を持ちつつも、多様な学習者と感受性に乏しい私との組み合わせでは、それを具体的に実現することはむずかしい。そういう逃げの姿勢がこの最低ラインを考えさせたのかも知れないが、その反面で最低ラインは必ず確保してみたいと強く願っていたのも事実である。ただそれをどういふ形で実現していくかということになると、何ら具体策はなくだ漠然と考えてきたにすぎなかった。

だが前記のようないきさつで近藤芳美氏を強く意識し、「無名者の歌」原著を読んだとき心に強く響くものがあった。短歌というも

のをああいふ角度でとらえ、作者をあのようにとらえ——それは、私がかうすボンヤリとしか持っていなかった「新聞雑誌に掲載された詩歌への関心を醸し出したい」という気持ちの中にはまったくないことであった。

① 作者は無名の庶民であり、具体的な生活者であること。

② 短歌はその人たちの「うたわずにおれない思い、内部衝動というべきもの」の表われであること。

③ それは「生」と呼ぶべきものであり、歴史・民衆詩史・戦後史としてとらえることができること。

これらを明確な位置づけで知りえたことは、漠然とした考えしかなかった私にはウロコの剝げ落ちた思いをさせた。そして「短歌というものを特殊な人々による特殊の世界の文学」（前記引用）と考へがちな学習者に対して、これらを教材化することは前述の最低ラインを実現確保するためにも有効であるにちがいないと思わせた。

三 聞き書き

これらをどういふ形で教材化してゆくか。私は一九七六年度に現任校に替わり、その年三年生の現代国語を担当した。その中で近代短歌史を取り上げ、教科書の文章をもとに歌風の変遷をまとめ、若干の抜け読みをすることを試みた。このときは受動的一方の学習姿勢をなんとか打開すべくグループ学習の必要性を痛感したので、短歌はむしろそのための素材として使用したにすぎなかった。翌七七年度ふたたび三年生の現代国語を担当した。このときは学習者の学習度もある程度とらえることができていたので、同じ単元を扱うに

あたり、前年度より「短歌」の方にやや重点を置いてみたいと考え
ていた。ちょうどこの夏、福山市で「福山空襲を記録する会」の展示
会を見る機会があった。その中に高校日本史の指導実践として「朝
日歌壇」の中の短歌をいくつか選び、その感想をまとめさせた文集
が展示されていた。私はハッとした。——早速二期期の学習指導に
参考にさせてもらった。77・8・18（木）の「朝日歌壇」から「戦
争にかかわりのある短歌」十六首を選び、この中の一首について家
人から「思い出」「感想」を取材して文章化する（グループ内で一
人——この年もグループ学習を組んでいた）という形で——。しか
し私は、この学習を国語学習の場として有効に組み立てあげること
ができず、前年度とはわずかに色の変わった作業文集ができあがっ
ただけであった。

△付記▽ 七七年当時は気づかなかったが、「無名者の歌」を取
り上げるにあたり筑摩書房指導書を読んでいたとき、次の記述が
あるのに気づいた。——（一読者の近藤芳美へ寄せた手紙の）最
後には、広島県立福山商業高校の矢田翠教諭が、日本史の教材と
して、「戦後三十年。いくさのつめあと——短歌をめぐって、親
と子の感想文集」を出した話が紹介してある。「朝日歌壇」の歌
を選び、「戦争の中に青春を埋めた親と戦争を知らない子の高校
生に配った。そしてそれぞれに読み、感想をまとめた。ししらけ
時代」といわれる今の世に、戦争とは何であったか▽を改めて問
いなおす」ための実践例である。——
私が見たのは、おそらくこの矢田先生のものであったのである
う。あらためて感謝申し上げたい。

四 一九七八年度の実践

さて本題の七八年度の実践であるが、それを総括してみると、前
年度の実践の規模を大きくしただけでその反省と欠陥はそのまま持
ち越してしまっているのに気づく。そんな未熟な実践であるが、一
応のまとめをしたいと思う。

(1) 対象学年と教科書

- (イ) 対象学年——本校普通科 一年
(ロ) 教科書の関連教材 筑摩書房・現代国語「死にたまふ母」

「無名者の歌」抄

(2) 指導目標

- (イ) 短歌と生活との結びつきについて考えさせる。
(ロ) 作品の背景としての生活に目を向けさせる。
(ハ) 取材・聞き取りの活動の中で、父母をはじめとする家人との
対話を深めさせる。

(ニ) 文章にまとめることを通して書く力を養わせる。

(3) 学習活動

- (イ) 「無名者の歌」の中から73首を選びプリントされたものを家
人に見てもらって、学習の趣旨を説明したのち、短歌を選んで
もらう。

- (ロ) 短歌に触発された「思い出」「感想」（必ずしも短歌の素材
・内容に関係がなくてもよい）を家人に語ってもらい、それを
聞き取る。

- (ハ) 聞き取ったものを整理して文章化する。

(三) 各自でボールペン原紙半ページに清書する。(→印刷して製本する)

(四) 以上は、個人学習・個人作業とする。

(4) 学習経過

〔第二学期〕

。10・18 学習内容・作業内容についての説明と指示。(プリン
ト5枚用意)

。10・19 教科書所載の「『無名者の歌』抄」の短歌について、
それぞれの短歌の作者の生活を想像して西洋紙四分の一大
に書いて提出する。——家庭では、教室での指示に従って
作業を進めてゆく。

。10・30 作業の進み具合を西洋紙四分の一大に書いて提出す
る。

。11・2 ・聞き取って来たことを文章化する。(必ず下書
きをする)(マス目は22×32)

。11・6 ・まだ聞き取っていない者は10・19の作業を進め
る。

。11・8 ・文章化できたら一人半ページでボールペン原紙
にガル。

。11・9 ・完成して提出。
印刷済みを配布。

〔第三学期〕

。2・5 多く取り上げられた短歌について、近藤さんの鑑賞文
をコピーして配布。

。2・10 表紙を配布、各自製本。(今までのプリントを全部綴
じ込む)

(5) 準備したプリント

(イ) 「無名者の歌」原著より抜粋した短歌73首を記載したもの(一
枚)——短歌は、「生活」を強く表わしており、思い出や感
想が語ってもらえそうなもの、歴史の一コマを表現しているも
の、を中心に指導者が選んだ。

(ロ) 家人への依頼のための趣旨を説明したもの(一枚)

(ハ) 昨七七年度の聞き書き文の中から抜粋した文章を記載したも
の(一枚)——聞き書きの一つの形として参考にさせるための
もの。

(6) 取り上げられた作品

百二十名の学習者がこの学習作業に取り組んだのだが、もつと
も多く取り上げられたのは、近藤さんご自身の分類による「農民
の歌」に属するもの(四十人)であり、以下、「働く女らの歌」
(二十人)、「戦争の死者らの追憶の歌」(十八人)、「さまざま
まな人生の歌」(十一人)、「療養所の女の歌」(九人)、とな
る。(その他は四人以下であった。)これらは明らかに本校の地
域社会の生活と歴史を反映している。うかつなことに私は、まさ
か選ばれはしないだろうと思ひ、それでも歌の良さとその歴史性
に惹かれて取り上げた「二番出の夫の自転車音の音きこゆ夜なべの
縫を吾も終らむ 福原幸子」が三人の学習者によって選ばれてい
たのは驚いた。炭坑閉山、エネルギー革命という歴史上の事実
を実生活の中にとらえられないのは学習者世代ばかりではない。

私もまたその一人だったのだ。しかも私は、生活指導にもかかわる者として学習者の生活の大きな断面をとらえていなかったのである。

個別の短歌で挙げると、「子を寝かすおとぎばなしに自らも眠りていたり仕事着のまま 働く女らの歌 依田和子」(十一人)、「はざかけは風の吹き路の荒々と穂拾うわれのうなじ冷えゆく 農民の歌 関ゆき」(八人)、「牛の角怖れて牛に親しまぬ妻を励まし一日田を鋤く 農民の歌 塩川直秀」(八人)となる。これらもまた、父母の生活と歴史の反映である。

また、話を聞いた相手としては、やはり「母」が圧倒的に多く七六人、次いで「父」二九人となり(「両親に」も三人あった)、あと「祖母」「おじ」が一ケタである。これまた学習者の生活環境の反映であり、家庭内の人間関係を明示するものであろう。

(7) 学習者の感想の中から

それぞれの文章のあとに二、三行の感想を書かせたが、その中から指導目標・学習活動に沿って「聞く―対話」「書く」「生活・歴史」「その他」に分けて抜粋してみる。

①聞く―対話

1 父の話を聞いている間中、なにかしら張りつめたものを感じた。

2 父の話から、幼少時代の苦勞の深さがよく感じられる。父が今までにこんな体験を話してくれたことがなかったのは、昔の苦しい出を思い出したくなかったのか、チャンスがなかったのか知らないが、僕は父の新しい一面を見た気がする。

3 僕は、父からよく戦争の話聞いたことはあるが、この時ほど父が一生涯懸命話してくれたのは初めてである。

4 母の懐しそうに話してくれた顔を見て、自分も嬉しくなった。こういう作業は初めてで、母もそんなに協力してくれないだろうと心配していたが、とても協力してくれ、こういうこともいいなあとと思った。

5 私は無口だからか、親と落ちついて話をすることはめったにありません。今回のように両親の若きころのことを聞いていると、あまり話はしないけど、細く強い糸で結ばれていると、そんな気がします。

6 父の話は、この短歌の作者の思いとは違っていたが、この話を聞きながら私は考えた。――昔の農業は確かに苦しかっただろう。しかし父は、そんな苦しかった生活の中に、充実した毎日を送っていたに違いない。そしてその充実感は、私達にはなかなか味わうことのできないものではないだろうか。――父の話を文章にするのはとてもむずかしかった。しかし、毎日の生活の中で母と話すことは沢山あった。父と話すことはあまりないので、この仕事で父と話すことができたのは良かったと思う。

②書く―文章化

7 この作業をするにあたって、父は快く応じてくれた。ぼくは話を聞いたあとでメモを取ったので、多少は話の内容とちがっていたかも知れないが、こんなものである。

8 こういうことは、文章を書くのが下手な私にとって大変なことだった。しかし、今まで知らなかった母の一面が分かり、よいこ

とだったと思う。

9 本当いようと、この歌の感想を文にするにはすこく抵抗があつて、思うように筆が進まずとても苦勞した。それに母も、あまり変わったことも言ってくれないので、もうこんなことはお断りだ。

〔③生活・歴史——内容〕

10 このような話を聞くと、当時の苦しさがわかる。いつ来るかわからない危険を背負つて働いていたと思うと、ぞつとする。だが石炭というエネルギー源は、いつのまにか石油、そして原子力の時代となっている。時代は流れても、炭坑の苦しみは忘れられないだろう。

11 母は考えに考えた末にこの歌を選んできた。母の青春時代が戦争とともに明け暮れたということもあつてだろう。……あれから三十年と少し。人生が二度あるわけでもないし、死ぬ思いをして来た両親には今存分に平和を感じてほしいと思います。

12 農家の人々の歌、原爆にあつた人々の歌など、これらの多くの歌はそれぞれの人々の心情をとてもよく表わしていると思う。のどかな感じの歌もあれば、悲しい涙をさそうような歌もある。人の世は実に様々だなあとつくづく思った。時には祖母や祖父の話も聞いてみるものだと思う。

13 生きようと思えば生き続けられるのに、自分から生命をなくしてしまふ人がたくさん居る。この短歌の母視のような思いを何人の人がしただろう。初めてこの話を聞いて、私の知らない父の歴史をのぞいたような気がした。——この話を聞いて、急に原爆・

戦争というものが身近に感じられてきた。この話をしている時の父の辛そうな顔を見ていると、私はこんな思い出は絶対に持ちたくないと思った。

14 「結局、自分の仕事を捨てることはできなかったよ。」とは、今で言えはまさに仕事の鬼なのだ。でも祖母を仕事の鬼にさせたのは一体何なんだろうか。祖母は早く夫を亡くして、この仕事で私の父を育ててきた。この仕事でしか自分達を生につなげるものはなかった。しかし祖母は看護婦としての自分の思想を、知らないうちに心の中に植えていたのであろう。祖母にとってこの思い出は苦しい思い出になつたままなのだろうか——何気なく祖母と話して来た毎日の中、祖母の過去など考えたことはなかった。過去を語るということは、その人の心を語ることも知れない。

〔④その他——問題の発見〕

15 沖繩島民は自衛隊を米軍基地をどんな目で見ているのだろうか。……一刻も早く沖繩島を本當の意味での島民のものにしてあげたい、と私は強く思った。

16 母はとても苦勞したんだなあと改めて母の話を聞いて感じた。昔は便利な機械がなかったのによく我慢してやって来たと思う。近頃よく農業を手伝うのだが、機械があつても途中でやめたくなるのに、母はよく我慢してこれまでやって来たと思う。昔の人はいろいろな面でもとても苦勞してきているので、今の人になり「忍耐」が身体に宿っているのだと感じた。

17 (長男を二月二十九日に失くした)父や母の悲しみは決して想像

できるものではないだろう。しかしその悲しみが深いだけに、次に生まれてきたぼく達への期待も大きいのではないだろうか。兄の命日は四年に一度だけか巡って来ない。

18 私は、自分が味わったことがない体験をしている母を別の方向から見たような感じがした。戦争のために一家の大黒柱である父親を亡くしたという人が多くいたということはよく知っていた。しかしいつも他人事のように考えていたので、このように身近に聞かされると、改めて肉身の尊さを感じた。そして、このような体験をしてきた母を尊敬することもできない。

以上の学習を、この年の現代国語の学習の流れの中に位置づけると次のようになる。「短歌学習の流れ」と「聞き書き学習の流れ」に分けてみると――。

(8) 現代国語学習の流れの中で

〔短歌学習の流れ〕

① 死にたまふ母・斎藤茂吉（9・4～10・11 11時間）

(イ) くり返し読むことよって短歌のリズムをとらえ、情感をとらえる。

(ロ) 他人のものではない、自分の感想を持つ。

(ハ) 連作としての展開を考える。

とくに(イ)に重点を置き、随意グループ（二～六名）をつくり共同して考えさせた。

② 「無名者の歌」抄・近藤芳美（10・12～11・6 7時間）

(イ) 作者の生活をとらえる。

(ロ) 詠みこまれている人物の生活や心情をとらえる。

(ハ) 自分自身の感想を持つ。

(イ)に重点を置き、近藤さんの鑑賞文・解説文を参考にして考えさせた。

〔聞き書き学習の流れ〕

① 野麦峠・山本茂美（5・25～6・5 4時間）

〔記録文学〕

(イ) 工女たちの生活とその背景をとらえる。（生活感情を明らかにする）

(ロ) 筆者の問題意識を理解する。

(ハ) 取材・調査の方法、資料の活用などを確認する。

「聞き書き」が文学にまで高められた作品を読み、その方法をとらえさせようとした。

② 梶田富五郎翁を訪ねて・宮本常一（11・13～12・12 10時間）

〔対談〕

(イ) 翁の生き方・人間観をとらえる。（生活感情を明らかにする）

(ロ) 名もなき人の開拓生活の中に籠められた民衆の歴史を読みとらえる。

(ハ) 筆者の聞き取りのすぐれた点を理解する。（とくに聞き手の意図や配慮に関して）

③ ゆき女聞き書き・石牟礼道子（12・14～12・18 2時間）

〔聞き書き〕

(イ) 聞き書きをする際の筆者の視点をとらえる。

(ロ) ゆき女の話題（素材）をとらえる。

ゆき女は何を話したが、筆者は何を聞き出そうとしている

か、を明らかにすることによって、この文章が聞き書きとしてすぐれている点を明確にさせようとした。

④黒い雨・井伏鱒二(2・5頁3・15 10時間)

「報告」

読解について分担研究したことをグループごとにクラス全体に報告する——(報告用の資料づくり)(報告用の原稿を書く)

(司会計画をたてる——予想される質問、質問がないときの進め方)

五 課題——「聞き書き」の国語学習としての可能性

今回の実践は短歌を材料にしておりながら、短歌の特性である「抒情性」というところへの接近がまっただくなかった。これが最大の欠陥であるが、今はこれをタナ上げにして、「聞き書き」ということに焦点をあてて、今後の私自身の方向を探る反省の材料にしようと思う。

私がこのたび取り組んだのも国語学習の一環としてであるはずだから、さきの日本史の実践例とはまた違った角度での迫り方がなくてはならないであろう。つまり国語学習としての「聞き書き」はどのようなべきか、「聞き書き」という作業を通してどんな「国語の力」を養うべきなのか、その可能性はどうかなどについて見通しを樹てねばならない。今回の場合、そういう見通しと細かい配慮がまったく欠けていた。その意味で、以下述べることは「こうすれば良かった」という観点でのものである。

野地先生はその「作文教育の探究」の中で、文章制作過程を「取材・構想・記述・修正・処理」と整理しておられる。この各段階に

密着した指導を適切に行なうことがつまり、前記の要請に應えることになるのではあるまいか。

(1) 聞く ↓ 何を、どのようにに、聞くか。

「聞き書き」ということを「聞く」の部分と「書く」の部分に分けることができるならば、「聞く」の部分はさきの「取材」の段階に位置づけられるであろう。とすると、「聞く」の部分は四活動領域の一つとして、それ自体の完成を目指すと同時に、「書く」との前提としてとらえねばならない。そこから「何を」「どのように」聞くかという課題が出てくる。これは言語活動の場面としては、インタビュールとか対談とかが考えられるが、その際に必要なことは「生き方」についての問題意識をもって相手の中に入って「聞く」こと、それは「聞き出す」ことにとどまらず「聞き上げ」にまで到ることである。それは相手の立場を尊重しながら聞く態度であり、学びとるという姿勢でもあろう。聞くことによって広い視野や多元的な見方を獲得し、それに基づいて自己の主体的な生き方を確立することでもある。そのために資料や文献を探索し、「何を聞くか」を具体的に挙げてみるなど取材の構想を立てることがぜひ必要である。具体的に言えば「減反」とか「炭坑閉山」とか「特攻隊」とか、概念的にしかとらえていないことばの正確な意味を、父母の生活実態や自分の人生を結びつけて把握するための質問の用意である。

そして、相手の話をよく聞いて要点をメモすることも大切なことである。藤原与一先生は「私の国語教育学」の中で、「聞く」原理として「受容・虚心・三段階の認識——素材聞き・文法聞き・表現

聞き——」を挙げておられ、さらに「聞く心がけを各自に立案させる」として、次の10項目を指摘しておられる。

1 心を清らかにして、相手の話を、心の中に入れ込む。
2 ゆったりと聞く。

3 人の話しの、はじめのことに注意する。

4 聞いている途中で、注意をそらさないようにする。

5 聞いている要点を書きつけることにつとめる(メモをとる)。

6 話しのおわりのことばに、とくに注意する。

7 聞く返事がたいせつである。

8 聞くのは心耳で聞くのである。心耳はからだ全体についている。——正対、まなこ、中座、私語、表情。

9 聞く理解は、自己の表現である。

10 聞く生活の根本にあるべきものは、ま心であると心がけたい。

国語学習としては、このような「本気で聞く場」をどのように設定してゆくかが大きな課題となるであろう。

(2) 書く ↓ 何を、どのように、書くか。

「聞く」の部分が、野地先生のいわゆる「取材」の段階に位置づけられるとすれば、「書く」の部分は「構想・記述・修正」の段階にあたるであろう。いわゆる作文のプロセスであるが、「聞き書き」ということに即して言えば、記録とか報告とかいえるものである。

この階段は、前の「聞く」段階で取材したことが材料になってゆくのであるが、資料や文献によって補強しておくことも必要であろう。そしてそれらの中から、自分の書くこうとする文章の主題をは

きりさせるのであるが、その際大切なことは生活を見つめようとする姿勢であり、聞き取った相手の生活実態が社会(の動き)とどう関連しているかを明らかにし、その置かれている状況や立場を明確にすることである。これがないと、その「聞き書き」は個人的なものにとどまってしまい、普遍的な広がりを持った「記録」や「報告」になりえないからである。そこには当然、書き手自身の「考え」や「感想」(「意見・判断・解釈」)が盛り込まれ、話のどの部分を切り取るかに書き手(「聞き手」)の個性と問題意識が強く働かねばならない。

そして、読み手を想定し、構成をたて、具体的な記述ということになるが、野地先生が「作文指導論」の中で示しておられるように、「修正」(学習者相互、指導者による)を繰り返して、よりすぐれた文章に練り上げてゆく指導がきめ細かになされねばならない。具体的な話をどう取り入れるか、方言使用をどう活かすか、相手のことは忠実に再現することの意味、人称をどうするかなどについて、具体的・個別的な指導が必要である。

さらに野地先生のいわゆる「処理」の段階は、「文集などの試みのほか、学習者の作文資料をどのように活用していくかが課題となる」と述べておられるが、今回の実践においても、「文集」は完成したもののその活用の方向には一歩も進めることができていなかった。

(3) 生活・歴史 ↓ 何が目標か。

今回の場合、「短歌に触発された感想・思い出を聞き取り、文章化する」ということを課題にしたのであったが、そのことの意味図や

目標を学習者の中に明確に定着させていなかったこともまた、大きな欠陥であった。その目標や意図とは、話し手（≡父母）の生活実態を知ることを出発点として、その中の喜び・悲しみ・苦しみ・憤りをわがものとして深く感じ取ることを通して、その生き方について考え、その背景としての社会の動きや歴史的事実を明らかにしてゆくことであった。そのことは、話し手（≡父母）の生きてきた時代状況をとらえることであり、現代をいかに生きていくかという自己の課題にもつながることであった。このことを何よりも学習者の胸の中にはっきりと位置づけておかねばならなかった。そのことがなかったために、単に父母の話の丸写しであったり、「うだったそうだ」というところにとどまってしまうものも多かった。

おわりに

以上いろいろと述べてきたが、これらの目標・意図や学習活動を具体的に実現することは容易ではない。容易ではないけれど、これらを実現することを目指さなければ、「聞き書き」を国語学習の生きた場とすることはできない。

今回の実践は、近藤芳美氏との「出会い」（私なりの）をきっかけに思い立った学習であったが、学習者を作業に駆り立てただけであったかも知れない。学習者が忙しくしているのを見て「国語学習」をさせていると錯覚していたのかも知れない。さきに述べた「最低ライン」の実現もはなはだ心寒い。いちばんかんじんな、それぞれの学習活動の節目節目でその目標を達成すべく、その学習活動を十分に活かす指導をすることができたかということもまた、はなはだ

心許ない。ただ、その「場」を設定しただけでその中味については何も用意していなかったのが実情のようである。そうではあったが、百二十名の学習者はよくついて来てくれた。私の十分な「指導」があれば、もっと「成果」をあげることができたはずである。「聞き書き」学習はそれだけのものを含んでいる。

今後は、学習活動の節目に応じて「学習の手引き」を用意し、国語学習の場として「国語の力」を十分につけてゆく学習活動を具体的に組織してゆくことをぜひ考えてみたい。

（一九八〇・四・五（土））

参考文献（敬称略）

- 1 西尾実国語教育全集（第七卷）
- 2 藤原与一「国語教育の技術と精神」「私の国語教育学」「理の国語教育と情の国語教育」
- 3 野地潤家「国語教育原論」「作文指導論」「作文教育の探究」
- 4 長谷川孝士「豊かな国語教室」
- 5 明治書院「現代作文講座」「高等学校における表現指導の理論と実践」
- 6 有精堂「高等学校国語科教育研究講座」
- 7 学燈社「高等学校国語教育実践講座」
- 8 教科書（三省堂、尚学図書、旺文社、学校図書）

（広島県立賀茂高等学校教諭）